

近世名家書畫談二編

一







甲辰初夏

近世名家  
書畫談二  
編

全四冊

東都雲煙堂

發兌



書畫談續編序



作書畫難矣。然不若鑒書畫之取難也。何以言之。凡作書畫者。筆墨必良。縑素必佳。而又有粉本法帖可以依擬。研石猶披堅甲。執利兵以臨乎陣。是以拙工劣伎。亦或有奏其功者矣。至鑒書畫則不然。蓋天下古書畫之夥。紛々紜々。不可勝窮。



而玉石混淆。真偽雜然。其所恃以鑒之。則唯一雙眼孔而已矣。此如夫有粉本。法帖可依。據也。是猶挺單身奮空拳。以當百萬之敵。自非有得神機。豈能免于挫衄乎哉。吾友雲煙主人長手賞鑒。其於真偽。慧眼如炬。一睨無所逃。余嘗出家藏數幅。覆歛。遂印。使其鑒之。以之奇中。

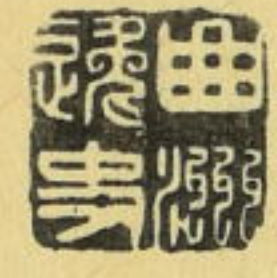
石不認一。嗚呼。雲煙之得神機。誠可畏已。宜乎其以此伎馳騁藝苑。而吾一人之鋒爭衡者也。往年雲煙泄其所得。撰名家書畫談二馬。其談奇拔。其論精確。能使讀者厥角稽首。而英悍之氣未艾。今又著續編四卷。其造詣之深。闡發之微。較之前輯。殆有加焉。謂之賞鑒之堅甲利



兵。不<sub>二</sub>亦可乎。夫甲兵之於神機。相去遠矣。然其堅利者。能使人勇武。則此編之出也。二安知<sub>下</sub>無<sub>下</sub>依<sub>下</sub>援<sub>下</sub>以馳騁藝苑。衝突陣者。不與哉。余請張瞻而俟之。

天保十五年甲辰抄秋油菴外史大橋

順撰



鼎齋生方寬書



素質  
能自  
秋香  
丹  
結風吹

秋生



近人之好古書畫。唯觀之。其是也。耳。至其剝蝕者。無以落款。去與心者。不顯著。則雖尤物。素如土芥。嗚呼。此風一長。偽者日繁。真者日湮。而後世將不能窺古人之精神。豈不亦哀乎。余乃不自揆。妄著此編。救其弊於萬分之一。因承椿山先生。字之蓮。以弁卷首。亦所以見拾珠玉於泥中。之意也。甲辰冬月。烟庵西村老漢。



近世名家書畫談二編卷之一目次

- 大意
- 鑑定論
- 半鑑の論
- 學者鑒定を誤る事
- 書画好小異同阿る事
- 藥山紫山書榮悴の事
- 妙語時小不遇事
- 圖樣雅俗好の事
- 和歌連俳作意好嫌の事

附茶論

近世名家書畫談二編 卷之一



- 墓碣碑帖の事
  - 真蹟の劣墨刻小勝る事
  - 書画臨寫可謹事
- 附裝潢字義

近世名家書畫談二編卷之一

雲煙子 安西於菟編次

大意

唐羊士諤の句小畫披靈物態書見古人心と是書畫  
 愛玩の真訣少て餘事と共ふ語るべし蓋し書畫ハ  
 六藝の一なりて最上乘の好事なり故小古人と聲  
 詩養心術と云り自ら書画成作る者能く體認せざんば  
 其の趣又惣て文辞小あづかるも此意成知ざれば野鄙小  
 温雅の趣成得ず故小唐土の文士名家大家共小此技  
 小工なり然も共見地無く此技のこ小耽るが却て薄俗とあるなり



素より君子小近き遊戯よて儉樸の多の—こあまば能く其  
道哉知る時ハ此好事小勝りける清娛何んや小人を  
閑居して不善小入り富足の身哉をて安逸小居まば  
酒小耽り色小溺ま竟小ハ性命哉短宿るも自然の勢  
あて此道小多よりなまさ故あり此清娛哉以て小人富  
有の身の淫樂哉防ぎ君子の正道小誘小便りとな  
さんこと可なり必自餘の骨董姦猾の業と共小語る  
ことなまのる画—

鑑定論

前編既小鑒定の事哉論して宋湯垕が觀画六法

乃ことを舉ぐ又夏文彦の看畫の法を録よその條小  
燈下小畫哉看る画りしと云一り是唐土文人看画乃  
規矩小して尤かくあるべきことなり志の違共 我邦を  
惣て辨給小埒何くと哉常と異なる風ありて是而已小  
ても鑑定の肯綮哉あま執所あり高陽山人の言小  
學識あきく目利定まらざる云々又學問の故小  
疑所ありて害となることもあるなり唐土ハ南北共小  
文人多くして畫意おのづから文意あり 我朝ハ文  
人ハ文人畫家者流ハ画家者流各別なる也和漢  
雅俗小徹底する小何らざるこバ觀る画りす予前編



或述一時ハいま此業小入るべしと學者の説の或  
 信ぢり今既小業小へりて累年頗る切磋の功成績  
 多る小学者の説の或も小も據るべし又多く看る  
 小も何れぞ能手の贋と拙作の真とハ實小毫髮の  
 多るひんて口舌小ハ説きざく真の真なるもの贋の贋  
 なるものハ一目瞭然として鑒者或まづるをのむるを  
 以て鑒定ハ實小一大事なりとて又一説あり鑒定  
 家而已小何れぞ萬る衆人より挙る時ハその言千  
 里の遠き小達を然も共其業の能と不能と他人ハ  
 知るべしその業小居る者ハ自然と知ることなり其実ハ

妄鑒亦共尊崇の人これを用ひて愚者ハあつて  
 信じて瓦を玉と玉を真鑒といふ時小遇さば璞  
 璧も瓦石と棄らる世小耳食と云ふ何れ古人所謂  
 耳或貴ぶの弊除きざく又精鑒小して真を贋と  
 觀るあり漏鑒小して贋或真と觀る有り何れも精  
 鑒といふ處の或も一多び贋の真とありて其の精鑒  
 小ありて贋と定まるありとるべし真物の妄鑒り  
 遇して玉を瓦と愚人小捨るまじハ至寶の泥中  
 埋没して歎まざるも多し是ハ書画の小ありて世  
 上の事小於ても皆然り近世小わづらひ上古も鑒



家小人物の偽有りこれハ天地造化の贋作と云ふべき  
 目力試人小誇りて世人小一隻眼有ること城知らむ常  
 小疝氣有りて我意小随て真を贋と贋を真と  
 一系衰小合ハざる人ありてと云ふ時ハ真蹟小批難と  
 くらよる小いり或ハ束脩の用衰小よることなご此類皆  
 人物の偽小して人道小何ぞ書画の偽物よりモ又  
 甚一かりあるかくのごとく妄人ある由小真蹟の亦小埋  
 小ま贋作の至寶となること実小歎かはしきことなる  
 ぶ如予かくいふと病狂喪心小ハ何ぞ又按小文徵明  
 先生の贋蹟を小真物なりと云ハき一類ハ君子の心

術を見る小是まじり

衡山先生 贋鑑識小精一有り是ハ吳中の人其鑒識  
 を求る小贋物をも真跡と云て、世に多有り

此邦を採幽永真をどの鑒識をばくる

不実小大名をなせべき人の所為なり白田山牛菴古筆  
 佐まのこれ小准む此輩ハ真を見て偽と云小  
 墨の人もハあざるなり

半鑒の論

己意鑒者なりと思ふ人小不鑒なる者多しと云  
 心世小生まある人兵学を好む攻城野戦の法を  
 暗記して我を勝敗存亡の機を得る事と思へる  
 類なり昔戦國の時趙の國小趙括といふものあり



若年より兵法を學びて天下小己小勝まざる者なりと  
甲一阿る時趙王是を用いて大将と一秦の國と戦ひ  
一小勝と成得む軍大い小破まじりとそ是兵家の  
こふあらむ萬事亦志り醫師が論をよくして療治  
を能せざると相撲と手技よく知りて勝とを得ざると  
同一書画も時代傳記を知り或ハ花幅を小收置て  
鑑定眞贋の所ふりてハ愚蒙なる人阿り是性の  
志つら一むる要ふして學びても至り難きゆぬ此ハ  
先生と崇めらるる時ハ鑑定を乞ふ人あり極て己まじ  
意を以て門弟子小示すゆ一果して誤ること多し

人の收斂の眞贋を辨むるハいと安きことなり己まじ收  
斂せんと甲一阿る時ハいとるる一を以て鑑定を乞ふこと  
なり又ある鑑定者ありとかく印章のことを論じて眞跡  
ある紙も贋なりといふさ迷ども絹統の類小押ときハ  
裝潢の仕方小より斜恣小なることも阿り又印色の  
善悪毛氈のう薦席のうちを以て織洪の多ぐい阿  
まじ印のありまじりて贋と定まざき小何れもかざる鑑  
家ハ印章なまじりてその小いりてハ觀ることを得づらむ  
上古ハ落款はるること少一骨董刀劍のごとく無名小  
て賞鑒はるハいりてぞや當世利の爲とありまじり



るの徒のそて何そびとありもの事ある故小無款ひんしてハ  
通用遠くありつうようこそ何きゆりき故小古画ここ今画いま共  
小無落款ひんまのハ商家の手てそ印いんを摸造もぞうしゆる  
まのまも多し是等ハ印いんあらく共真跡まにせきありてと  
魚いさなとくとく席上せきじやうの兵法へいほう畠水はたけみづ練れんの徒との鑒識かんしき大半  
右みぎの類るいあり志し共又難なんきと小毛こけありて又易やすきふ  
何なにぞ樂らくまのハおのづから會得えとくと

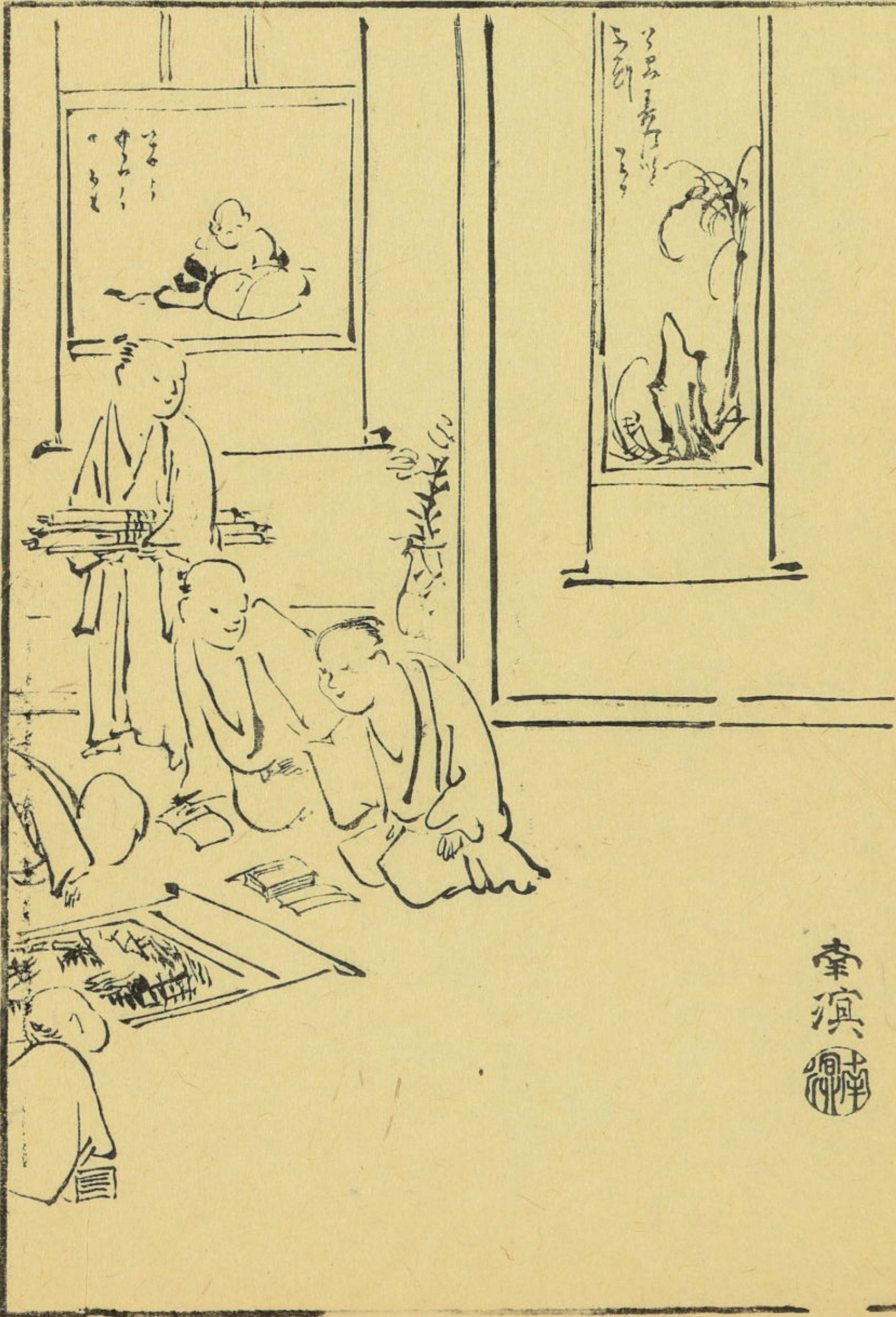
予よ友素原善ともすげん我われ一則いつそくを示しめて曰いは夢溪筆談むせきひつだんを聞き  
る小書画せうしやうゑを論ろんじて云い藏書畫者ざんしやうゑしや多取空名たしやくうな為鍾王  
顧陸之筆こんとりく見者爭售けんしやう此所謂耳鑒こゝ所謂耳かん又有觀畫こゝ又有かんゑ而以手

摸之相傳も以為色不隱指い者為佳畫しやう此又在耳鑒こゝ又在耳かん  
之下謂之揣骨聽聲こゝ下謂之ちゆうこつていしやう此こゝ當時書画ちやうじしやうゑを鑒定かんていする  
者の状しやう和漢わくわん同どう一いつありて見けんるる一いつ揣骨聽聲ちゆうこつていしやうハ所  
謂書画いの形容けいようを以て鑒識かんしきするるまの是こゝなりなりこも  
より論ろんあり世間よ多た耳鑒みみかんありて眼鑒がんかんははくなく  
眼鑒がんかんありて共亦神鑒ともしんかんありあり其こゝ我書画われしやうゑのの一小せうあり  
こも猶なほくくのごときこと

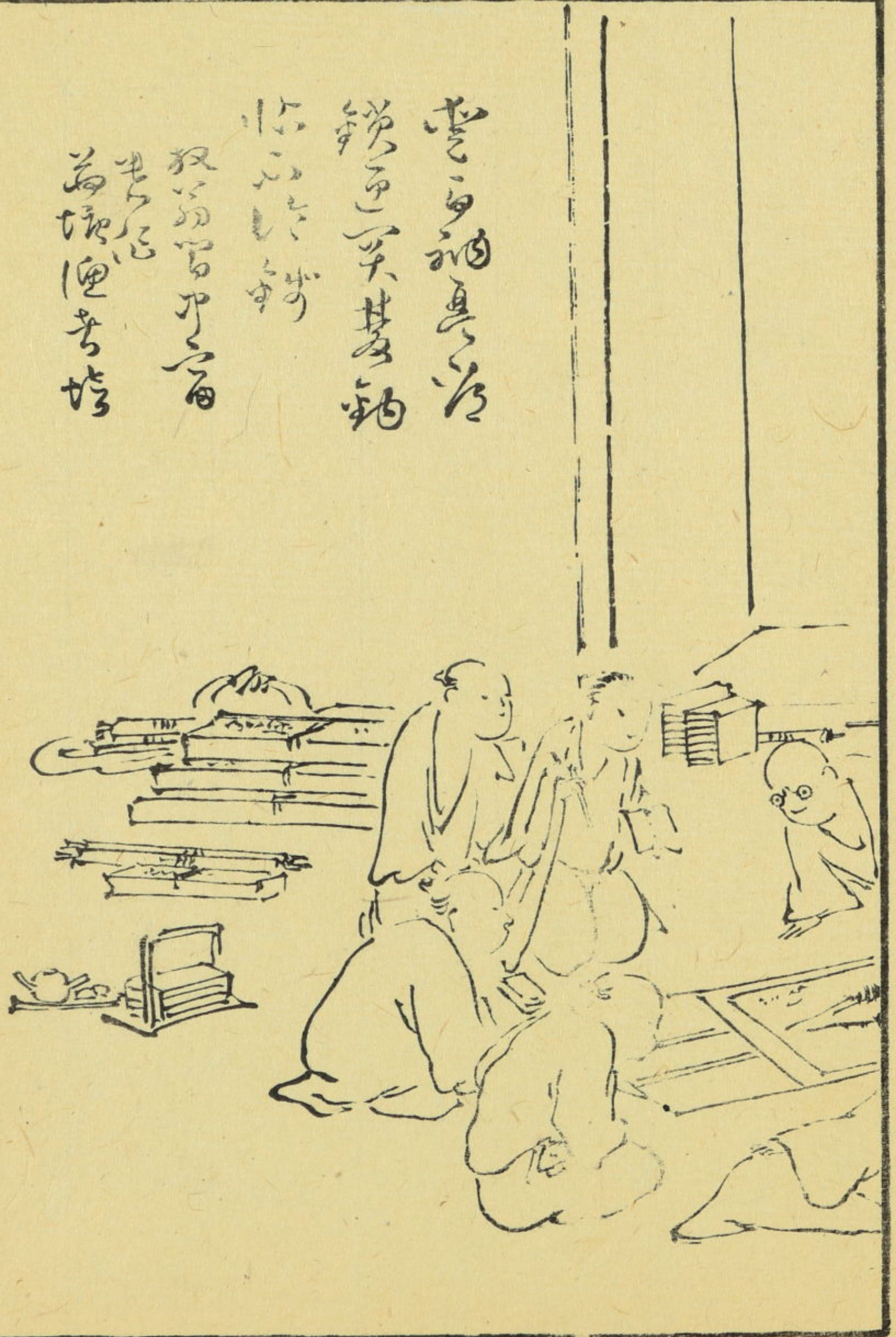
學者鑒定を誤る事

書画家しやうゑか儒醫歌誹にゆいか諸家しよか者流しやうりゆう各かくその先軍せんぐんの遺墨い試  
觀かんて真偽まゐを談だんするるあり是こゝハ無益むえきの論ろんなりと思おもハる





南溟



雲之福真之  
鏡面天其物  
此心之  
叔心官平之  
善境便者坊



先鑒家と好事家との別あると云知るべし。知之者  
不如好之者。好之者不如樂之者。と云。其道を以て  
能く知るべきふあ。初年晩年中年の速い有り  
或ハ結構の常ハ異る有り又ハ席書或ハ臨書あるハ見  
る所小よりの揮毫或ハ蘭醉の筆跡千變萬化な  
り。吾書と云ふも十年前小よりの我書と云思ハ迷ぬ  
と。有り又他人の我書小做りて書くるを見て実ハ我  
書なりと云ふとも有り。書画成なるものハ已まら量  
の外ハ觀ると云得ぬ。鑒定家ハ是を樂  
こまを道とて。その用を由一ハよくその變化成

知る小い。固よりなり。今時高名なる老儒先生何  
り其門下の書生常ハ古人の書を得て先生小鑒成  
乞ハ先生云。予頗る書画を花貯。其まど。他の真偽  
を辨む。小い。誰何某ハその道を得て能く真偽  
成識。彼小見せて定免。可なり。是其の業の  
大いなる。雲々諸家の僻論を思。小その人の書。まき  
文字。あま。真なるを。贋なり。とい。其詩文の面を  
き。小會ハ贋なるを。見。真なり。とい。有り。由一ハ贋作  
を。な。者。此。意。を。さ。とり。又。能く。校。謀。を。な。贋  
成。肆。小。い。







して別条なりしとぞ文字知自慢小命をきてんと  
 する者あり本草を覚へて共其の毒哉解こと  
 を知り多る者あり是書画のこと小何らざる茶話  
 の一笑小傳べ一鯉いの河豚えんなることハ論衡えん炮炙やう論えん杯  
 小見一多ることあり志こ共書論画論を知りありとも  
 書画を見るときハ不識ふしの書画屋小元及ばざる魚い  
 或ハ博識はくしを自負こする人ありて多ましく書家小あり  
 てハ書論を難ト画家小會えてハ書論を問ふ人あり  
 共俗小云半可はんとりし者ありて筆墨ひつを執とてハ豈尋常あや  
 の書画家小元及ばざる魚い也

書画好小異同あり事

世人の珍賞ちんする物先儒流せんをいひ惺窩せい羅山ら丈山せん舜  
 水藤樹仁齋すい祖来その諸先生しよを初はとして人ひと譽えて寶た  
 とす去る共こ学風がくのことなるハその流派りゅうよりて違ちり  
 物学ぶつを学まなぶ者ハ閻えん齋さい学がくを呵かて閻えん齋さい学がくをまなぶ者  
 ハ祖来そを誹ひる是こ世よ上の常じょうあり去る共こ廣くわく儒流じゆ  
 を好む人ハ其その差別さべつなくその好品こう小會えて買取かりて挿架さつ  
 とんこ共こ尊奉そんとハ之これ又好事こうの玩弄わんありて魚い  
 或ハ堀川くわ派はいばりて好こうあり物派ぶつを好こうるをよらふ  
 あり是ハその門流もんを学まなぶ者の收花しゆを所ところあり其



他諸家者流比目かくのごとくその内儒流も奇跡稀にして茶家の玩弄も遠く徇流も清巖江月翠岩など人の尊ぶべき茶人の用とせざる者あり其餘蘄山ハ南里月九山盤珪無難樾水白隱遂翁惠南師ハ各高僧なり奇蹟ある人なるは茶家の珍賞とせき物なきは其の時不遇ハば收斂する者稀なり思ふハ世間の奇跡を穿鑿せんとて俗家のもと免れ合はざる其の奇跡を穿鑿せんとて人の志ざる故なり是にて茶家の玩弄も遠く奇跡遊戯もなるとして人の善を稱し徳を挙功成歎し奇を讚し已まざる古人の

劣るまじく人を善し進むをいとせざる心あり多きものなり一実小真の好事者稀なるが故も亦小真の重宝なる物の出ること遠く世人の多くは也品の中を又とせざるもの多きを好むことハ亦小真の重宝なるもの少く世間通用の浅薄のものも高價なる事とハなるなり

蘄山紫山書榮悴の事

附茶論

禪家の高僧蘄山紫野の二派今時榮悴の勝劣をいへ先黄蘗ハ隱元木菴即非南源高泉悦山以始して墨池家ハ獨立曼公大鵬喝浪道本など各千里の



波濤を越 本朝小帰化して道德高きものもあむ文  
 墨も心小兼具きりそ一此諸賢の本邦小来る小あむ  
 只手跡のこ船来をわつるの好品とすきや大徳寺派  
 みていをも一休澤庵ハ性豁達して凡小超ありその余  
 春屋玉室玉舟春澤江月清巖翠岩江雲江雪天祐の  
 輩得道の浅深いふあるやあむと床頭小掛画き能書  
 を見む志多共利休宗旦古田金森小遠公などの  
 茶人皆此紫山小参禪キ一故おのづから茶道小も達  
 せしむと見ぬ故小也の茶家専ら是故貴んで今  
 茶ろふ小與うらざる人をもさして賞む様ふがこれ

書跡も亦稀かり予書画を嚮を業として藤紫二山  
 の書跡の遇不遇を見る小玉ハ埋りきて尾の貴むるも  
 似たりかくしそ予嘗て茶を煮を知むとてしりり  
 阿らむ早小常今の茶ハ古道小よる茶小阿らむ別小  
 一種世事應接の茶とありあるやうなり器物ハ實々  
 らとあり書画ハ事實傳記を志むとて只人の耳近き  
 を尊む或ハ詩文の長くして解をざるハ客小失禮なり  
 として俗用の書画を用るなどさう小雅事を尚し習氣  
 なく一種の後世茶の湯ハ多くと見えたり茶事の原因  
 始を尋ねば俗意めてハ出来ごととあむる



茶ハ元來道を學ぶ者書を讀座禪する小睡魔  
の侵ををさるんが為小喫せしを知識のころり小よりて  
茶ハよく禪意小かまひころりとして専ら禪機ふりり  
式法を定免即悟道の一助とせしなり然る小のり  
翫弄とありて東山殿の比益盛小なりしハ専ら玩  
古の為のこりて既小驕奢の意を生じ是が為小天  
下の古器古董書画をこりてく集め多のり小なり  
是ぞ是利家衰微の基とハありしれバ心得あるべき  
ことありその後天正慶長の比ハ太閤殿下の機謀小  
よりて軍事の用とありし其極小至りてハ利休を

罪きるるその思慮いふ小ありし今太平鼓腹乃  
亦代小ありてハ主客尊恭の禮儀とありしその時小  
志こりひてそあしく用をたるとし禪意も其背の  
むと云ふ一ささ共玩古の用多る時ハ浮費夥くし  
て驕奢の害を生じ軍事の用とる時ハ疑惑の害生  
じ尊恭の礼多る時ハ佞媚の害を生じ又貪  
欲の害ハ各三ツ小通じてまぬれざるなりそはこれ  
を禪家小用違バ大ハ悟道の助とありと云ハ吾我  
小して用る故あり京師の人ハ能く儉約のこり小  
是を用るとしハ是ハ土地の風小して無益の酒食小



代えてもちゆるなづー又は禅意の去り〜むるとも  
 小〜金く害の〜小も何〜江月清巖の書幅何の爲  
 小掛ると云を去る〜今世の茶人〜珠光利休の  
 輩をちづ〜多々〜茶意の古道は  
 千羊丹頂鶴。萬歳緑毛龜。などの語を書多〜ハ禅意ハ  
 面白〜茶席小用を〜画も又是小回〜又儒者の  
 書あり共宋儒の径語或ハ李杜の詩句を〜書多〜ハ  
 禅意小合てお〜掛て用あり當今ハ其用由  
 魚き紙捨て捨べきを用由是ハ故事より茶を崩〜

茶より故事乃意を崩〜茶の茶多〜を去る故  
 事の故〜こと紙知〜その巧拙を論〜て兔角  
 世ハ少〜紙紙〜ハ〜其〜き〜を  
 也や予ある時清巖和峯法圓の語を書〜横物紙  
 壁間小掛多〜小ある茶人来りて五字〜七字〜一行物中  
 てほ〜き〜とり又ある時徂来翁の五言一句書れ  
 を儒者是を見て云々〜惜む〜何より小文字数少  
 く〜賞心薄〜詩〜て〜文章〜も〜全編  
 小〜ほ〜き〜の〜是〜の望小表裏〜異〜  
 其意ぬ何〜也〜予今先輩小聞〜ある小因〜



茶より小三害有るを論じて珠光利休の本意小復一茶道の淳素を失はざる事誠福のよき事

妙語時小不遇事

予阿る時翠巖和尚の書きし涅槃妙心の一行物を茶人小見せたる小涅槃とハ死する事とありて忌み嫌ふる甚し按小涅槃妙心正法眼藏の語ハ禪家第一の心法ふして法華の妙法天台の中道實相浄土の弥陀佛真言の阿字本不生等のごとく此道小肝要の語なるを茶人の嫌ふぬ何るる心も也千年丹頂鶴萬歳緑毛龜などの浅俗小近きと日をも同よして語るべしぞ福壽海無量ハ俗情小喜ぶべき

語なき共讀經小耳なき多る故誰えきり小わりの予又阿る家を訪ひ小人刀活人劍と書あるを五字一行なりとてふやく古筆家の極をとり裝潢小錦繡を用ひて是誠茶席小掛より主人云武士ハ人を活むる小帶刀をるとハよき悟りなりとて喜ひ不ろ一是ぞ禅家小所謂妄心なる者もと思ふまじくをうかりき此語を書きある禅僧殺の字を落しき様ありころと云ことハ今世の茶人のいきなりをそめて姦商なきが裁きりて巧小裝潢せしものにて殺人刀活人劍の妙語を損壞しある大ひある罪あり又予若友池田松石澤菴が書きし應無所住而生其心の一行



を茶人の手より得て大に喜びて云々ハ茶人此意を知らず  
して買うるに無所住の語小苦心せし故予秘んごらふさと  
せどもきくは遂に予が又購ふ事小なりぬと今其語を按る  
小自己心小ともある所なきを無心と云無心ハ天地回一  
て是即悟道の義なり閑の夜小をぬ鳥のとききれば  
生まぬさねの父を戀しきの歌をど回一ころみて面白  
き妙語あるを俗人住家る一とつとて覺えを嫌ふ  
笑ふゆきの甚しきなるを如

圖樣雅俗好の事

今去畫幅を好者を俗字の一行書を好ふひとくし

出来能く共列仙君子道釋などの像ある圖樣をばく  
しとて賞玩すること遠し是ハかの色是小向ハ恐味の  
心生むる由一ふきふ柳蓮鷺鳥の類ハ陰氣の樹  
鳥とて嫌ひ屈原巢父許由夷齊蘇武昭君などをバ流  
さま人成ハ終を全くせざる人ありとてきくハ蟬丸を指  
者ありとて忌ミ鴨長明瀧の音を聞をえ是小ひとく  
あふ小ふりまじり此人ハ皆後世の規本ある先賢  
尤尊崇まぶき故去るぞ利休古田金森小堀氏乃類  
つぎの終を全しせざれ共をまじりハ昏迷しとてつ  
ぎハ何や一まじりあり聖賢道釋或ハ龍席或ハ牛馬杯

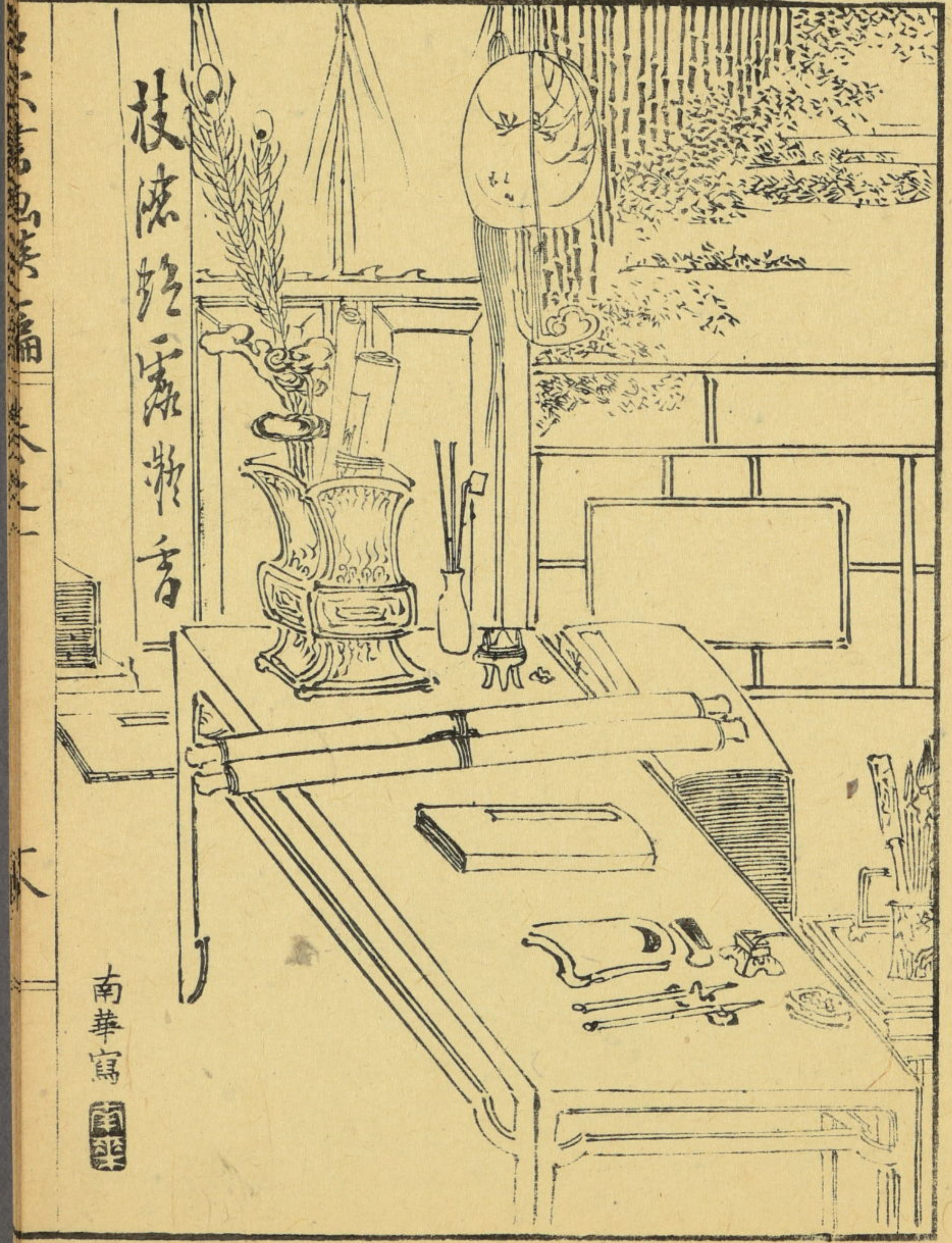


各格法ありて精神を窮乏さば畫くことあり故に尤  
 肝要とする要ありまらば一筆の席書一興ふ楽しむる  
 戲墨は面白しとする時ハ孰も此道は學びて筆力精  
 神をつくべきものあり百年以前の画三幅對の中は道  
 釋の圖を畫し茲當今の意まで見ば寺院の掛幅のやう  
 思ふべき理りぞり先書畫好事の法ハ或時ハ聖賢乃  
 像を掛て聖賢多んこと欲し或ハ神仙道釋義勇の  
 像を各々の域小くしんことを欲し或ハ筆力精神の妙は  
 見てハ己まが業の不足を歎じ或ハ山水花卉の優美は  
 暢然として養心の術を思ひ或ハ同好の朋を請し茶は

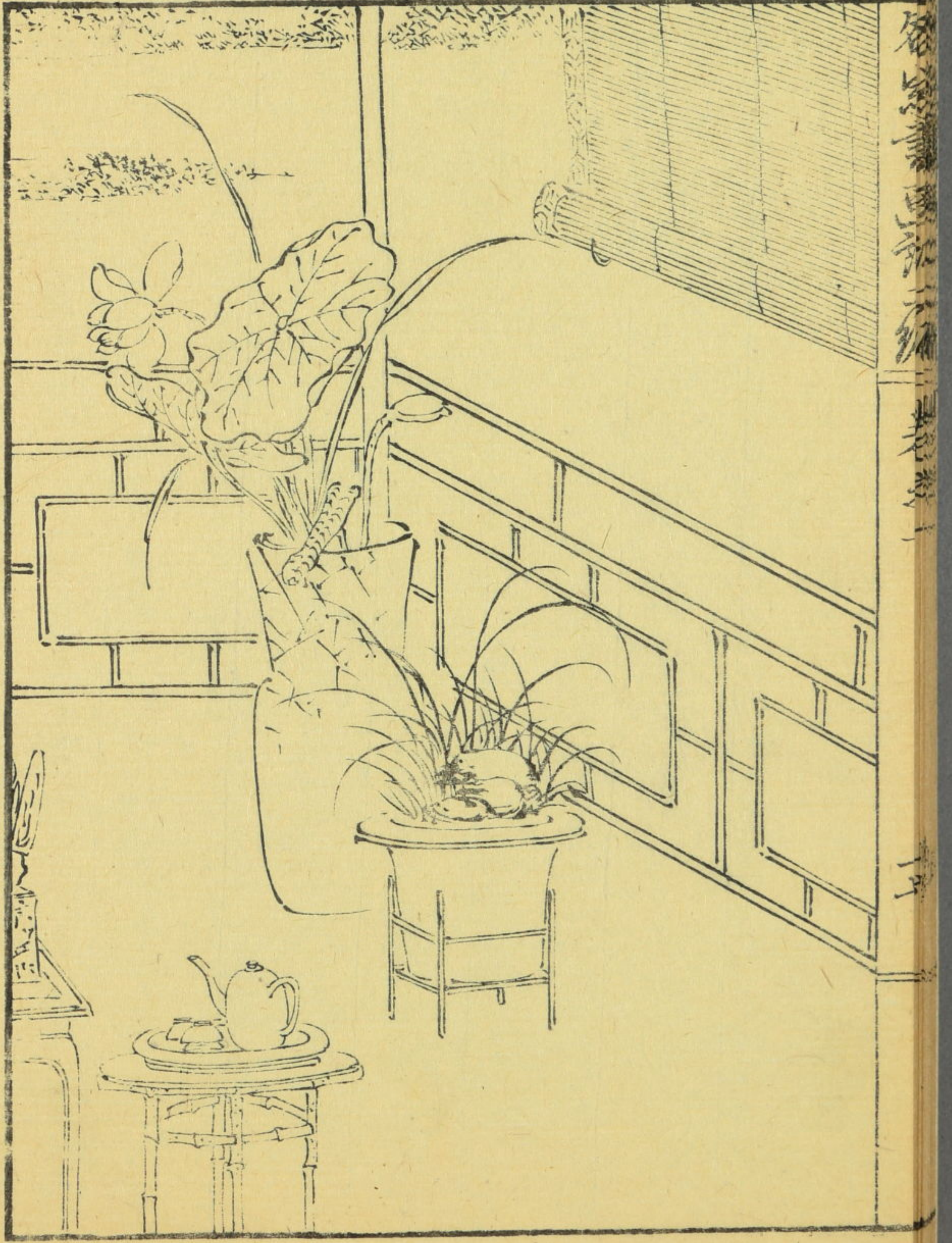
點して雅談子供するなり其真意を達ば圖樣百品萬  
 物敷を以て樂事とする處きりなり因ふ云當今の書畫  
 愛好者そのとる所おのく義あり左ハ其大畧はあぐり

- 一 画を學びて業の巧なるを好者
- 一 鑑定は好て精神風韻を賞する者
- 一 好事おしとて圖樣の異なるは其の愛する者
- 一 業の巧拙を不論人物は愛する者
- 一 畫者お不拘飄逸の作を好者
- 一 華美おしとて着色没骨を好者
- 一 灑落おしとて澹泊なるを好者





南華寫





右好所の者ハつゞきハ実素なり予がごときハつゞき此を  
このむふつゞき鳴呼是書畫を樂者なり也書畫ハ苦心  
するそのなり也

蓮ハ君子の徳小比を泥よりつゞき小染む香氣  
高く花葉何ぞやのなり故小宋の大賢周濂溪は  
此免て愛する後世を志尚高潔する者皆この  
花を愛觀するハなり一竺土ハもとて此花を尊崇  
する故小我朝ハ佛像のつゞきハ瓶小をもつて是  
成つて稱又ハ寺院の池をよみ必こを栽るなり俗意  
ハ此花の佛邊ハ有哉そを死をいつよ心より忌見由

婦女小兒の見ふく男子するその心を清く徳を修る  
氣象なきハ憐むるなり因ハ云豫樂院殿雪舟の画  
々々雅摩の大幅長二尺八寸横二尺五六寸也何ぞも此は度  
所圍の床小掛の幅ハをかる大幅を何とて掛らる  
ふ也と何ハ夜會の茶小掛遊むるなり又四季  
各極ハ文を或ハ月日など何ハ時節相應ハ一畫  
圖夏ハ冬のみ冬ハ夏の圖成かるとなりと何ら  
とあり又春の茶の會小日寛の葡萄の画成掛のハ  
こと何れ賛ハ春雨の字何れ成をなりとぞ 槐記  
ハ小名公の所為也なりとる事なり



和歌連俳作意好嫌の事

今世和歌連俳を懐紙或ハ短冊とて賞玩も小先哀  
 傷歌或ハ戀歌或ハ述懐或ハ送別の類紙嫌ハ又俳諧發  
 句を詞のうらみ忌多きこと何れも意ある紙嫌ハ  
 こそあやむる甚きあり四時循環と暑往て寒  
 来り憂心の花を盛なるふ何れも人紙嫌わき衰ゆる小  
 つりてハ人きりて来むあるひはきろの吹ゆて雨ふあふこ  
 風ふちぎるあはせさ紙思ハ暑の堪えぬ蚊のうるさき  
 負き人のやうくふ渡ぐと紙思ハ秋の何れハあづき  
 出小感一ゆも落葉と鹿なく時のうつりゆくは海

いづまもあはれなきるハあり和歌俳諧の真情といふを即  
 ちのこぞ一貫之朝臣の述あり愁傷愛慕戀をの  
 所ふいづまハ鬼神紙をうごこし猛きはるふと哀まじ  
 つゆこと紙志なきる武士の心紙をやうとくこと何れとあり  
 定家卿小倉色紙のうちを七か名當今の懐紙短冊好乃  
 意ハ合紙の志なきる共歌学者俳諧者流のハわら  
 陋習ハ云はざることして昔聲小吠る徒尋常の茶人の風ハ  
 化さす作意も世も小媚あること紙好ハ紙中の換壞  
 多るをバ廢する小至るあり実小あざりきことなきこと  
 後ハ真跡世もきりて贋作のこの通用となくんといふ



先多とていそ其角が句小

せめてその貧乏柿小梅乃花

と是况味ある句小は是共俗士ゴウシハ貧乏ビンバツといふ字ジ成ナリまマいイふ

去るまをちや成翁が深川ハ貧乏の中とて

米買小雪の代衣やなけり改中

といハ是ハ貧乏ハその句小らり多き共詞の上小何ナニいイふ

さればいときも病ヤマトことなく人皆是成よるこり史シ登トウが

腰ぬらのを小かたひる鳴子丸

といも腰ぬけの五文字成忌嫌小なり是も真小好マコトヨシとて

誰人ハその况味を去りて賞ウラナヒをまじも俗士ゴウシの好ヨシ小合アヒふ

ハ販買バンバイの通ツウ用ヨウハ遠トウ一其真小好マコトヨシといふ字ジ家イヘのいイまマ世セ小

出デざるズらそソうウこコなナきキ凡ソノ人トシテハ尊ソウ歎トク富トク貴キ小處トコロしてハ世情セヨウ

おオうウくク哀アハレまマといふことコトをヲさサらラ志シるルことコト難ナシきキ故ユヘ小書カキ成ル

よヨこコ道ミチ成ナリ学マナブびテ人トシテ情ナリの向ムカフ背セ女メ事コトの變ハル態カタ成ルをサらラり

といトイふフこコろロ志シるルまマババ詞シ野ノ鄙ヒ小コて逸イツなるルまマいイまマこコ

みミて感カンずルことコト皆みな道ミチ小入イるルのはハなりナリ讚サン称ショウ慶ケイ賀カのノ詞シ

ハ大オホ抵ヒ皆みな富トク貴キ小コて野ノ逸イツ小コらラくク感カンずル所トコロをサらラり

昔ムカシ齊サイ景ケイ公コウ大オホ國クニ小王コウ多タるル日ヒの長ナガ久キウなナんンことコト成ナリ欲ヨク一死シとて

成ナリつツまマいイこコろロ多タるル小側ソバ小何ナニもモ史シ孔コウ梁リョウ丘キウ據キョ誦ソウ諛エンて共トモ小

注ツキらラまマババ晏エン平ヘイ仲チュウハ獨ドク笑ウツて死シ生セイ去キ来ライの道ミチ理リ成ルまマいイこコろロ



景公大不慙多事ひ〜となり人壽大九七旬と定はまざるは  
 先五六十ふ〜て足るものなるは亀鶴の千萬は羨〜若  
 その三分一を毛同ド〜んふハ世の中大ふ〜ふ〜る  
 人よ〜その情理を知り安然〜て生涯を〜くりなバその  
 場ふ〜んでハ帰路の〜〜〜別ふ驚〜びきまを〜び  
 思〜る予〜ま〜生所ふ〜〜〜お覚束〜  
 萬物命数何〜そのうち人ハ智ある故ハ四情深〜よく  
 智は〜情は制〜べ〜古人龜鶴はよ〜ら〜ハ長壽  
 成尊ふ〜ま〜共鶴ハ食は少〜〜て身は保ち龜ハ氣  
 を吸〜て食を飼〜る毛何〜と云ふと〜ハ人の寡欲〜

て心は浩然ハ養ふ〜〜人〜も〜龜鶴の〜後  
 五十ふ〜て命は終〜ふ〜き前定の数あり〜清心省靈  
 て諸欲は制〜寡〜七〜百壽を保〜も〜至る〜きあり  
 近世一茶子が辞世の白〜とてア、〜よ〜生〜ハ龜の百〜  
 と〜あ〜〜〜き〜〜り〜り〜

墓碣碑帖の事

書は學ぶ者先楷書ハ虞世南廟堂碑顔真卿多寶塔  
 碑家廟碑歐陽詢皇甫君碑九成宮銘柳公權玄秘塔  
 碑等の類を〜て善〜と〜行草ハ二王帖は始〜〜て玉煙堂  
 傳雲館戲鴻堂より以下諸法帖の〜る〜いと備〜る〜



篆書ハ李斯の嶧山碑李陽氷の三墳記以て第一ハ隸書ハ漢碑数百種夏承體ハ一種のその小ハ曹全碑以て一ト也唐碑ハ梁昇卿御史臺銘史維則大智禪師碑を善トシ行書ハ李北海雲麾將軍尤佳品トシ書法學ぶ者ハ碑刻以て一ト法帖佳品有る或二トハ廣澤翁の以より安永天明年までハ碑本至て稀ナリト文政中、新渡船來して今ハ何れも採く志ること得たり又和帖墨本正面摺ハ近世予友杉本望雲有るその清法ハ倣い得て尤髣髴なり實ハ文墨のひくくる時をまじりと云ふ志ふる古碑墓碣銘ハ寺院の塔牌ハ等一きそのなる哉

書法學ハ君子是哉机上ハ排置して和漢同一小技玩々俗士の福祿壽或ハ千年丹頂鶴など戯まてや中見ハその身法晋唐宋元の墓所ハ置ハ似多りと云ハ萬巻書開見古人トシ見識を俗意ハよる時ハ生前の人亡人哉友ト云ふの心トシ一層一嗚呼雅俗の意懸隔ハくのぬ一

真蹟の劣墨刻ハ勝る事

真跡ハ至て稀ハ一ト又碑帖の及ぶ處キまハ何れも謝在抗云ハ大抵真蹟雖劣猶勝墨刻之佳者ト何れ上古ハ姑置元朝以來趙子昂の書画尤贋作おび多ク一明ハいつてハ唐寅吳寬ハ姑置文徵明董其昌の大家贋本幾百種ト



つよこと諸書よいて世人の知る要なり故小文人雅士真蹟  
の此土にあるべきやなりと云ふハ理りなり然も共又つよ  
説ありると贋なりといふ古其時代よして門弟子或も  
能仿ふ者の傳寫なるバ又墨刻の佳なる小勝るものあり  
是ハ手本と云ふふ多る物なきに價小よして收花なき  
あり又墨帖といふも贋本多きことハ此道の諸先生小問ハ  
尋て知る益一

米庵先生之説也

書畫臨寫可謹事

附裝潢字義

廣澤先生云米元章其花多る王羲之の真跡来禽帖  
の事云々曾經人用薄紙搨書墨即透数行仍汗静

地深可歎息云又云影書ハ尤大切小ぶ一黄硬紙を  
りて遊絲筆紙をて明窓小向ひて手のきく多る細心の人  
寫さむ益一と書画ハ尤く何るべきものなり又云書畫紙  
表具なる紙裝潢装池とも云ハ四方小縁あるの称なり池  
淡もいけなり池ハ四方小堤あるなりと巻軸ハ掛物紙  
横小見多る物なきに今之の巻軸ハ甚略ふして書画紙愛  
護する心小ハかならんと云

於菟按小裝潢の横紙淡池の義なりと心得て装池共  
いハ誤りなる也  
装潢の潢ハ上声  
潢池の潢ハ平声  
元來唐の六典小裝潢一匠  
といふ者何りて即ち今の 官府の表具師なり潢の字を



釋名小潢ハ染紙也といひ廣韻小潢ハ染書也といひ  
 表具の時黃蘗の汁紙をて紙小色紙付ることあり是ハ  
 蠹虫をいとの生せぬ為なりとぞ故小六典の註小を裝成  
 而以蠟潢紙也と見内後の人新奇の説は考へ出して  
 四方小邊ある故なりと云ハ牽強小近一此より外庵外  
 集真珠船なりと小委一久辨一多邊バ併と考へる

近世名家書畫談二編卷之一畢



